

「インパクト・ファクター」
(Impact Factor : I F)

院長 西 田 敬

インターネットのブログと同様に、流布し始めた耳慣れぬ言葉にインパクト・ファクターがある。学会に与える衝撃度（影響力）指数という和訳が適当か。医学雑誌の位置付けの目安で、医学論文の評価法のひとつともなる。採択された論文名は「次の焦点：卵巣癌は卵巣由来ではない」と云う相当に衝撃的なタイトル。冒頭に掲げた掲載誌は、Oxfordから出版されているAnnals Oncology（腫瘍学年報、2013）で、IFは7.040と相当に高い。しかし、筆頭著者のLouis Dubeauはこれより前にIFで判断すれば、更に上位のLancet Oncologyに「The cell of origin of ovarian epithelial tumours」が収載されている（卵巣上皮性腫瘍の細胞起源：2008年、IF = 24.69）。

論文の背景：外分泌腺が無いにも拘らず、卵巣がんの90%は腺癌であり、卵巣を被う腹膜、即ち卵巣の漿膜（表層上皮）から発生すると主張されてきた。

論文の構築：卵巣腺癌の卵巣外からの発生を主張する論文を渉猟し、纏めた。

結果：歴史的には卵巣の上皮性癌の明確な診断基準は示されていない。その上、形態的に卵巣癌と似た上皮成分は正常卵巣には無い。実際、卵巣癌の如何なる前駆病変も認められた事はない。しかし乍、子宮外で認められるミューラー管由来組織と卵巣の癌や低悪性度腫瘍、及び嚢胞腺腫とは密接な関係がある。変異BRCA遺伝子キャリアーに対する危機低減手術（risk reducing surgery）で得られた卵巣と卵管を精査した結果、最も普遍的で侵襲性が高い卵巣漿液性腺癌は表層上皮由来ではなく卵管采から発生するものが大部分であった。

結論：山積しつつある明白な根拠により、卵巣癌は卵巣表層上皮からの発生ではなく、子宮を除く生殖管に遺残・分布するミューラー氏管上皮から発生し*、この事が多彩な組織形態や進展形式に寄与している。

なでしこ雑感：WHO卵巣上皮性腫瘍分類でも表層上皮由来で一貫してきた事は、この腫瘍群の見出し（caption）がcommon epithelial tumourからsurface epithelial-stromal tumoursへ変遷して来た通りである。非を認めるに吝かでないWHOは2014年発刊の最新版より上皮性腫瘍のcaptionを躊躇なく撤廃してしまった。卵巣腺癌の出自は今後に残る。癌発生の起源が不明、或は曖昧の儘では1) 早期発見、そして2) 早期治療、さらには3) 予防切除など出来る訳がない、危機低減手術（risk-reducing surgery）ですら夢のまた夢に過ぎぬ乎。

*下線部はLauchlan SC (1972) が提唱した Secondary müllerian systemに相当する。

